

からずこの點に關して著者の吐正を仰ぐつもりであるが。こゝでは著者に學んだことの多かつたことを告白して感謝の敬意を表する。いづれにしても本書は人文地理學者のかうした方面の研究に對する一大指針でなくてはならぬ。これ予の敢て江湖に推奨する所以である。(藤田)

○富士の信仰

定價四圓

非野邊茂雄著 古今書院 淺間神社藏版

菊版四五四頁、富士の研究第三篇である。我國には奈良朝以前に既に山岳佛教が興起して役小角の活動があつた、しかしさうした西方からの影響を外にして我富士山は、常陸風土記に記されてあるやうに福慈神として、我等の祖先に尊崇されてゐたのである。斯道の専攻家である非野邊氏はさうした祖先の原始信仰と、かの後日の山岳佛教と相まつて後世の富士信仰に發展した道行をいかにも明確に詳密に記述されたものである。淺間神社の歴代の宮司がかうした著述の編纂を企てた美譽が、非野邊氏の如き眞摯の學者の手を俟つて、愈其の美果を結びつゝあるのは誠に慶福に堪へぬ所である。(F)

○富士の動物、富士の植物

岸田久吉、矢部吉藏著

淺間神社藏版 古今書院 定價六圓五十錢

本書は實に富士研究の第六篇であつて、これ又前書と同時に出版されたものであり、石原氏の地質編などと合せて推奨すべき、富士の科學的研究著述である。圖版鮮明、敘述詳密、哺乳類からヤスマテ、蜘蛛類に至るまで、生とし生けるもの

すべてが出てゐる外に、植物篇ではこれ又あらゆる富士の植物が細叙されると同時に、各方面の景觀に關しての概説、主要植物、比較研究等十章に五つて論じてある、これ又結構な書物であると感賞するのみではあけぬ、依つて以て登山の業ともなし、動植物採集の指針とせねばならぬと思ふ。(F)

新著即報

○東洋學藝雜誌 第四四卷一二號 昭和三年十二月 黒鐵の智識(坪谷幸六)

○The National Geographic Magazine, LIX, 6, Dec. 1928.

Falcon, the Pacific's newest Island. (J. E. Hoffmeister and H. S. Ladd).

○The Journal of Geology, Vol. XXXVI, No. 7, Oct-Nov. 1928.

Mandering in tidal Streams (D. C. Barton)

○Petermanns Mitteilungen 74. Jahrg. 11/12. Okt. 1928

Die natürlichen Landschaften Nord- und Mittelasiens. (A. Käselau).

Der Schiebspruch über die Palmas. (Miangas-)

Insel. (M. Langhans-Ratzburg).

○Geologische Rundschau, Bd. XIX, Hft. 5. Nov. 1928.

Das Wachstum der Kontinente nach der Zyklus

theorie (1). (E. Kraus).

○北海道石炭鑛業會々報 第一七一號 十一月 北海道石炭

鑛業に就く(F)(直原佐平)

△朝鮮五萬分一地形圖修正版 利原 昭和三年十月 陸地測

量部

○世界地理風俗大系(第二回配本)第一九卷 アメリカ合衆國

(上)淺野一男、太田正孝、大山卯次郎、神川彦松、鶴見

祐輔、新渡戸稻造、平井正之、水野恭介、宮武繁、渡邊

萬次郎執筆 東京新光社發行 昭和三年十一月 豫約價

二圓八〇錢

○Das fossile Lebewesen. Von Dr. Edgar Dacqué. 1928.

Julius Springer, Berlin.

○岩石鑛物鑛床學 第一卷第一號 昭和四年一月 方解石の

加熱に因る軸率、而角及び容積の變化並に其解離現象

(神津椒祐、益田峰一、上田潤一)

硫化金屬膠臘液の乳濁計的研究(1)(渡邊萬次郎中野長俊)

鳴子火山略報(上田潤一)

鳴子火山熔岩の化學性質(志賀義雄)

三宅島産橄欖石の化學成分(瀬戸國勝)

本邦に於ける火山岩の分布(1)(神津椒祐、渡邊萬次郎)

石油生成の機巧(1)(高橋純一)

○Foraminifera. Their Classification and economic Use.

By Joseph A. Cushman. 1928. Cushman Laboratory,
Sharon, Mass. 5 \$.

○地理學評論 第五卷第一號 昭和四年一月

本邦の隆起三角洲に關する考察(渡邊光)

日本内海西域周防灘南部の成因論(東木龍七)

地震と地塊運動(坪井忠二)

○地質學雜誌 第三五卷第四二二號 昭和三年十一月

隱岐島後の地質學的並びに岩石的研究(其五)(富田達)

偏光顯微鏡の結晶學上並びに化學上に於ける應用(第二

報)(其一)(高橋學而、早川堅太郎)

The earthquake near Satporo City regarded from

a geological standpoint. (Shōzaburō Watase)

○上越南線建設工事概要 鐵道省東京建設事務所 昭和三年

十一月

○郷土 第二卷第五號 昭和三年十二月

信濃官牧と伊北牧場(一)(藤田龍洲)

寺鐘に就いて(矢島麟太郎)

北の深及び松窪附近の地形と交通に就いて(小松三郎)

伊那富村に於ける交通調査(伊那富村役場)

○科學畫報 第一二卷第一號 昭和四年一月

人工最大の驚異バナマ運河(綱島定次)

世界最長最大のトンネル(渡邊貫)

ナイヤガラの水力發電(大井愛雄)

世界の無線網(稻田三之助)

世界最近の航空路(岡崎誠一)
コロラド峽谷の美觀(上原敬二)

熱火の海キラウヰエナの火口(渡邊萬次郎)

熱風渦巻くサンラ大沙漠(榑原直人)

エローストーン國立公園(田村剛)

海水而下の死海(加藤武夫)

マンモス洞の不思議(後閑文之助)

戦慄すゝ大氷河(後藤静雄)

近く實現せんとする關門海底トンネル(佐伯謙吉)

エトナ火山の噴火(田中館秀三)

◎Productidae of China. Part II. By Y. T. Chao.

Palaentologia Sinica. Ser. B. Vol. 5. Fasc. 3. 1928.

Geological Survey of China, Peking.

○地質彙報 第十一號 民國十七年十月 北平地質調査所

熱河北票附近地質構造研究(翁文灝)

北平西山妙峯山鑿鑿山一帯之火成岩(王恒升)

重慶貴陽間地質要略(樂森璿)

奉天復縣五湖嘴煤田地質(王竹泉)

○The Philippine Journal of Science. Vol. 37. No. 3.

Nov. 1928.

An asphaltite from the Philippine Islands.

(Edwin T. Hodge).

○Bulletin of the Geological Society of America.

Vol. 39. No. 2. June, 1928.

Dead sea Problem: Rift Valley or Ramp Valley?

(Bailey Willis).

○The Pan-American Geologist. Vol. L. No. 4. Nov. 1928

Physiography of Roof of Earth (II). (S. W. Boggs)

Cretacic Fossils from Lower California (F. M.

Anderson)

Outlines of South African Geology (Charles Keyes)

△臺灣二萬五千分一地形圖新版 海口(昭和三年九月)

二水(同十一月) 陸地測量部

△臺灣五萬分一地形圖新版 嘉義、麻豆、臺南北部 昭和三年十一月 陸地測量部

年十一月 陸地測量部

◎大阪案内記 大阪市役所編 昭和三年十一月 大阪市役所

産業部

○地學雜誌 第四〇年第四七八號 昭和三年十二月

岩手縣東磐井郡薄衣村附近の地質に就て(一)(齋藤文雄)

本邦油田に於ける溫泉(二)(千谷好之助)

蒼鉛鐵及其産地並に蒼鉛鐵から見た日本及支那(四)(植

村榮巳男)

丹後地震及其地變(四)(渡邊久吉、佐藤戈止)

秋吉臺カルスト(石灰岩景観)(五)(佐藤傳藏)

○地質學雜誌 第三五卷第四二三號 昭和三年十二月

偏光顯微鏡の結晶學上並びに化學學上に於ける應用(第二

報)(二)(高橋學而、早川堅太郎)

筑波附近のInjection-felsの成生に就て(豫報)(杉健一)

○地理教育 第九卷第四號 昭和四年一月

六船渡線沿道の地形地質(上)(渡邊萬次郎)

外國地誌教授の順序に就きて(田中啓衛)

富士山にかゝる笠雲に就て(石原初太郎)

福岡縣久留米地方の地形に就て(加藤増太郎)

アマガニヌタン略誌(下)(早坂一郎)

大阪平野の發達(四)(伏見義夫)

會津盆地に於ける墜落の一考察(上)(山口彌一郎)

○科學知識 第九卷第一號 昭和四年一月

地球の年齡(羽鳥俊一)

最深坑井と最多量出油井(大村一藏)

○信濃教育(保科百助君記念號)第五〇七號 昭和四年一月
長野南縣町信濃教育會發行 七〇錢

雜報

○雜誌『岩石礦物礦床學』の創刊

東北帝國大學理學部岩石礦物礦床學教室を中心とした日本岩石礦物礦床學會から見出しの月刊誌が本年一月を以て創刊された。由來仙臺の該教室は特に岩石礦物學に關する新研究を續々として發表して居て世界の該學界に重きを爲されて居る所である。神津、高橋、渡邊の三博士が力を併せて生み出された雜誌であるから純學術的に新研究を邦人に傳ふる點で大切である。研究報文、研究短報文、評論及雜錄、抄録等の諸欄があつて斯學研究者の指導、參照に屆めてある點は一見明かである。特に評論及雜錄欄は三博士の綜合せる考説を平易に教へんとするが

如く、抄録は其の數の多きこと第一號のみにて五十八に達し雜誌の發刊せらるゝや『地球』誌の編纂所である京都へさへも其の抄録原著の原文題目の問ひ合せが來て、おかど違ひの場所で斯學普及の間接援助をした位ひ、斯學研究者に執つては有益な欄である。こんな努力した雜誌が毎月發刊されることは公衆には有難いことであるが編纂者の御骨折りは一通りなことではないと思へる。僅かの故障の故を以て發行が遅れたり月刊が隔月刊となつたりせぬことを本邦礦物岩石學界の爲めに祈つて止まない。『地球』にしてもさうである様に専門雜誌の永續する第一の條件は購讀者の多いといふことであるから、地學に一顧の愛學心を有つて居る方が、一人でも多く日本岩石礦物學會へ入會されて、このよき雜誌の續刊を援助されることは『地球』雜報子の望んで止まぬ所である。因に云ふ、本誌は一部賣六十錢で、學會に入會すれば一箇年六圓で雜誌の配布を受けられる。會費送先は仙臺市東北帝國大學理學部内日本岩石礦物礦床學會瀬戸國勝氏宛振替仙臺八八二五番である。

○上越南線工事概要

一、位置 上越南線は高崎驛に起り兩毛線に沿ひ新前橋驛より左折利根川を溯り、澁川、沼田を経て湯楡會に到るヤループ狀に旋回して上越國境茂倉母(海拔六五三〇尺)の直下を延長六哩餘(三一八三一呎八)の清水隧道を以て貫き上越南線に接續し長岡に達するものにして其延長四六哩二七鎖餘なり、然して清水隧道は延長の大なる